

第2章 調査結果

1. 親子の同居・近居についての意識

1-1. 親との同居・近居

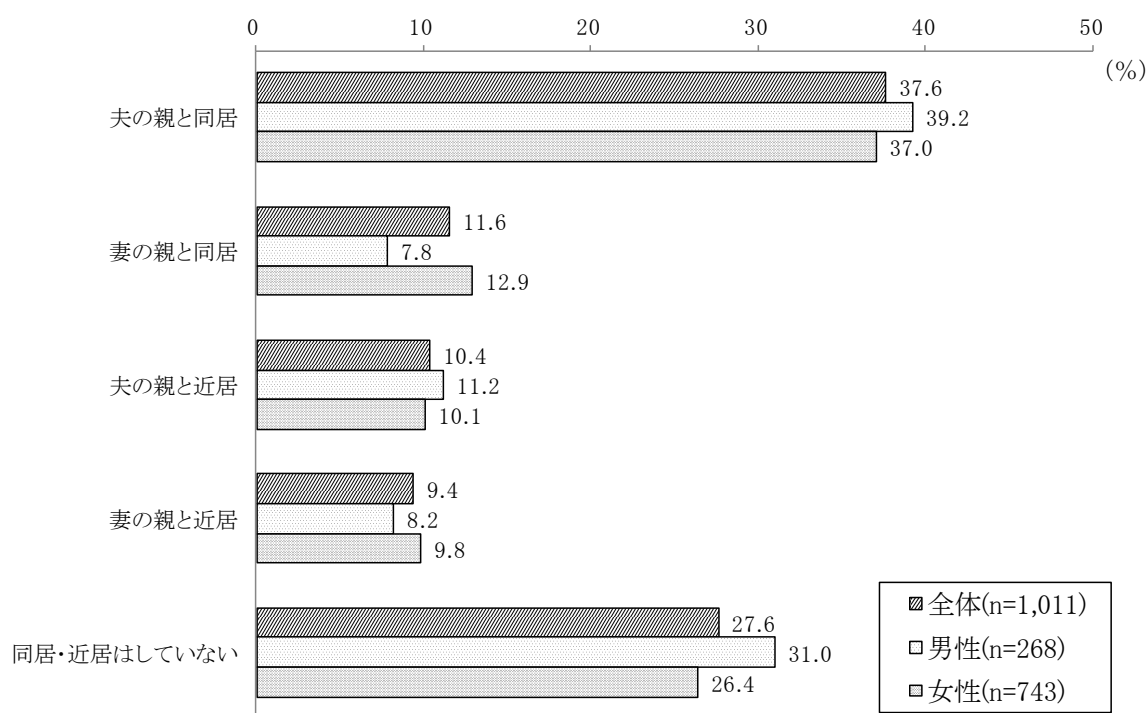
(1) 同居・近居の実態 (1Q1)

はじめに、18歳未満の子どもがいる (子どもの学齢について高校生以下と答えた) 1,011名について (以下「子世代」、親との同居・近居の実態をみる。

親との同居・近居に関して、全体で最も多かった回答は「夫の親と同居」(37.6%)であり、続いて多かった「同居・近居はしていない」(27.6%)を約10ポイント上回っている(図表1-1)。「妻の親と同居」(11.6%)、「夫の親と近居」(10.4%)、「妻の親と近居」(9.4%)がこれに続いている。

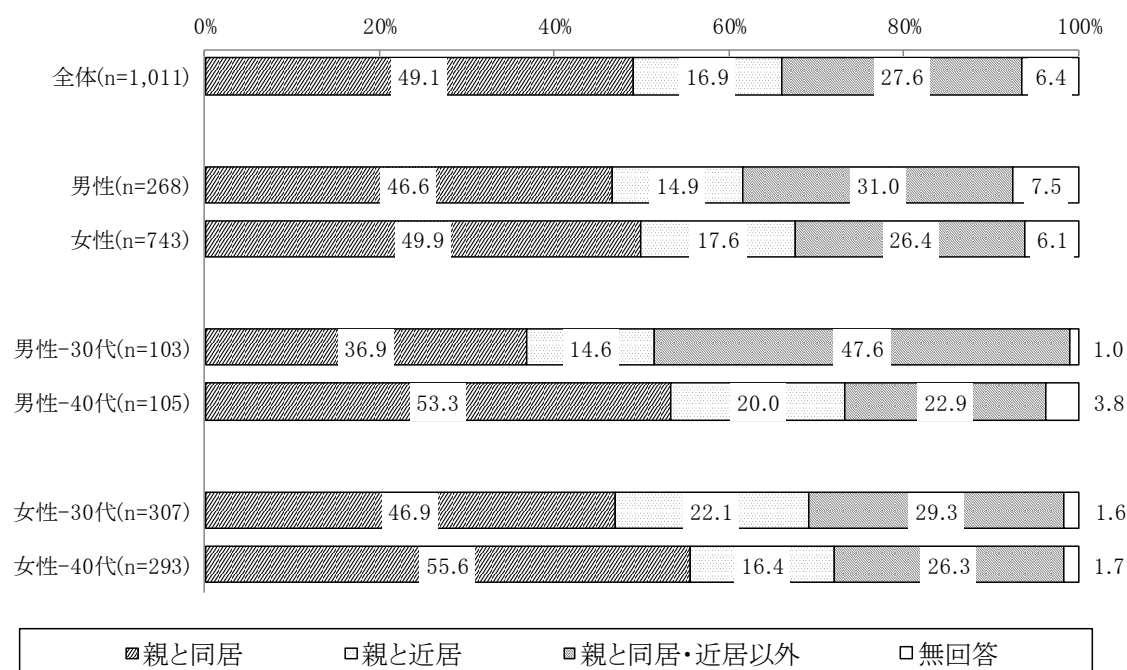
夫の親もしくは妻の親のいずれかと同居・近居している人は、男性で61.5%、女性で67.5%を占める(図表1-2)。男女とも、親と同居・近居している人の方が、していない人を上回っている。ただし、性・年代別にみると、男性では年代によって親と同居・近居する人の割合に差があり、40代の73.3%に対して30代では51.5%にとどまっている。男性30代では、親と同居・近居する人と、していない人がほぼ同じ割合を占める。

図表1-1 親との同居・近居の実態 (全体、性別) <複数回答>



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。

図表 1 - 2 親との同居・近居の実態（全体、性別、性・年代別）



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人。「親と同居」は夫の親もしくは妻の親と同居する人、「親と近居」は夫の親もしくは妻の親と近居する人（同居する人は除く）。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。性・年代別では20代と50代以上の表示を省略。

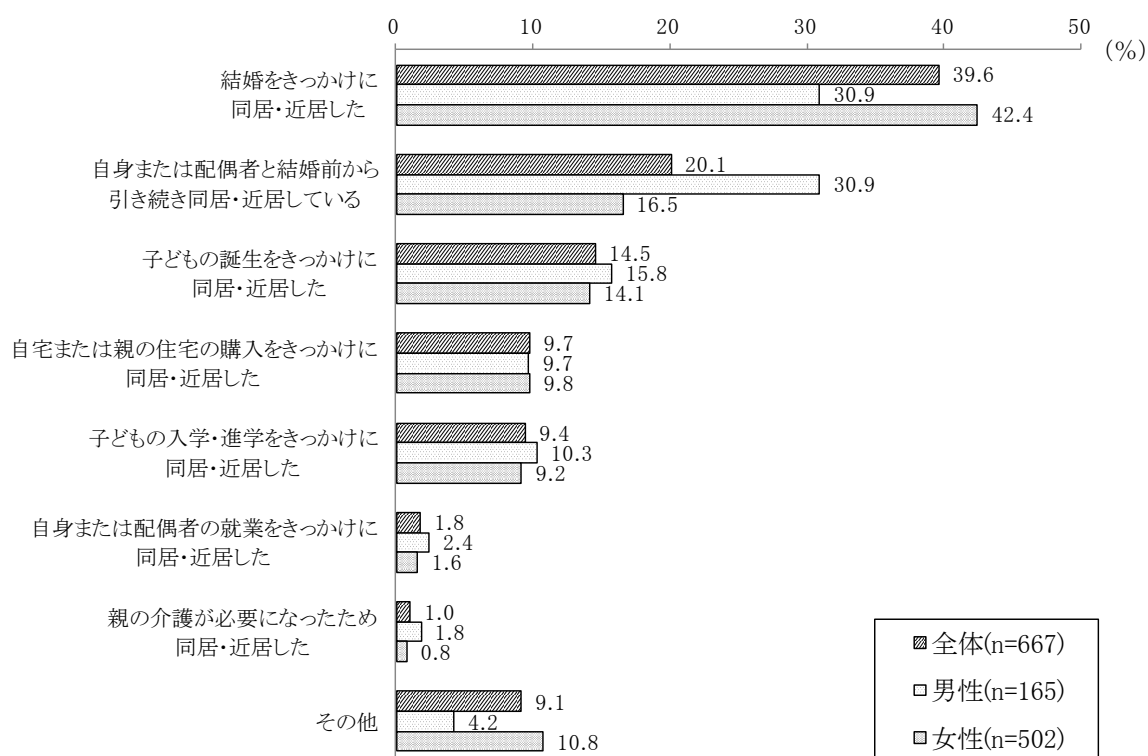
(2) 親との同居・近居のきっかけ(1Q2)

続いて、子世代のうち、現在親と同居・近居している 667 名について、同居・近居をしたきっかけをみる(図表1-3)。

全体で最も多かったのは「結婚をきっかけに同居・近居した」(39.6%)であり、「自身または配偶者と結婚前から引き続き同居・近居している」(20.1%)、「子どもの誕生をきっかけに同居・近居した」(14.5%)がこれに続いている。

性別にみると、男性では「自身または配偶者と結婚前から引き続き同居・近居している」と「結婚をきっかけに同居・近居した」が同率の30.9%を占めて最も多くあげられている。これに対して、女性の場合、「結婚をきっかけに同居・近居した」(42.4%)が圧倒的に多く、2番目に多くあげられた「自身または配偶者と結婚前から引き続き同居・近居している」(16.5%)を20ポイント以上も上回っている。女性の方が、男性に比べて、結婚をきっかけに親と同居・近居した人の割合が高いことがわかる。

図表1-3 親との同居・近居のきっかけ(全体、性別) <複数回答>



注：回答者は子世代のうち、現在親と同居・近居する人。

(3) 同居・近居する親から受けている子育ての支援（1Q3）

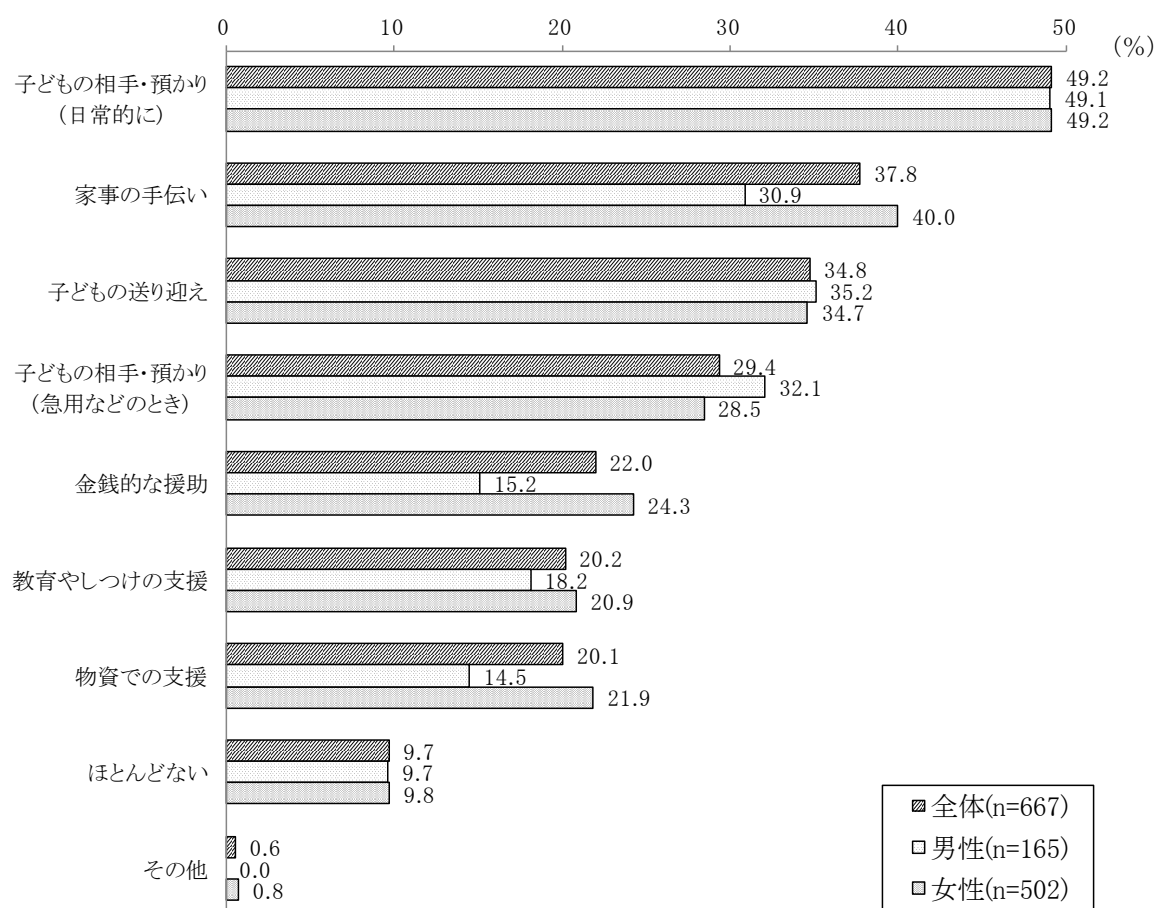
子世代のうち、現在、親と同居・近居する人が、親から受けている子育て支援の内容をみる（図表1-4）。

全体で最も多くあげられたのは「子どもの相手・預かり（日常的に）」（49.2%）であり、「家事の手伝い」（37.8%）と「子どもの送り迎え」（34.8%）がこれに続いている。また、日常的な場合に比べると低いものの、「子どもの相手・預かり（急用などのとき）」が29.4%でこれに続き、以下「金銭的な援助」（22.0%）、「教育やしつけの支援」（20.2%）、「物資での支援」（20.1%）の順となっている。

「ほとんどない」と答えた人は9.7%であることから、ほとんどの人が親から何らかの形で子育てに支援を受けていることがうかがえる。

性別による違いがみられるのは、「家事の手伝い」「金銭的な援助」「物資での支援」の3項目である。いずれも、女性の方が男性よりも支援を受けていると答えた人の割合が高い。

図表1-4 同居・近居する親から受けている子育ての支援（全体、性別）＜複数回答＞



注：回答者は子世代のうち、現在、親と同居・近居する人。

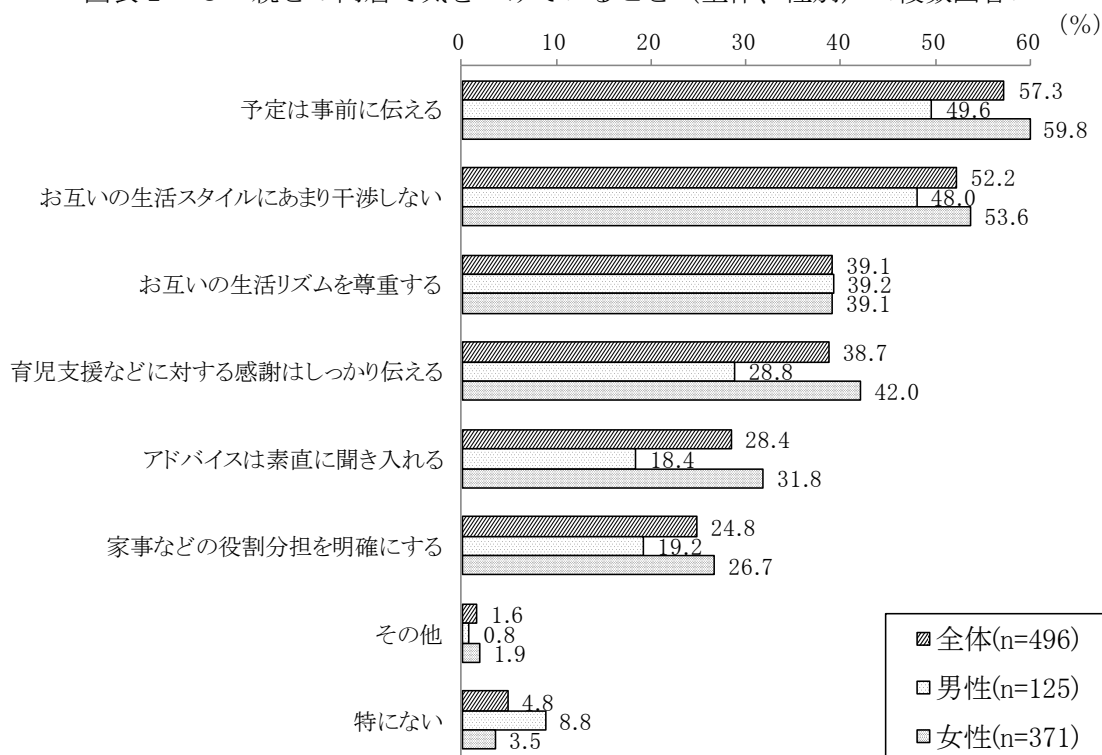
(4) 親との同居で気をつけていること (1Q4)

続いて、子世代のうち、現在親と同居する 496 名に、同居して気をつけていることについてたずねた結果をみる (図表 1-5)。

全体で最も多くあげられたのは「予定は事前に伝える」(57.3%) であり、6 割近くを占める。「お互いの生活スタイルにあまり干渉しない」(52.2%) とともに、これら 2 項目が半数を超える。以下、「お互いの生活リズムを尊重する」(39.1%)、「育児支援などに対する感謝はしっかり伝える」(38.7%) が続き、「アドバイスは素直に聞き入れる」(28.4%)、「家事などの役割分担を明確にする」(24.8%) の順となっている。「特にない」(4.8%) と答えた人は僅少で、親との同居生活において何かしら気をつけていることがあることがうかがえる。

性別にみると、ほぼすべての項目で女性が男性を上回っている。中でも「予定は事前に伝える」(男性 49.6%、女性 59.8%)、「育児支援などに対する感謝はしっかり伝える」(男性 28.8%、女性 42.0%)、「アドバイスは素直に聞き入れる」(男性 18.4%、女性 31.8%) の 3 項目では、10 ポイント以上の男女差がみられる。女性の方が、同居する親とのコミュニケーションに気を遣っている様子がうかがえる。

図表 1-5 親との同居で気をつけていること (全体、性別) <複数回答>



注：回答者は子世代のうち、現在親と同居する人。

(5) 家族の理想の住まい方 (1Q5)

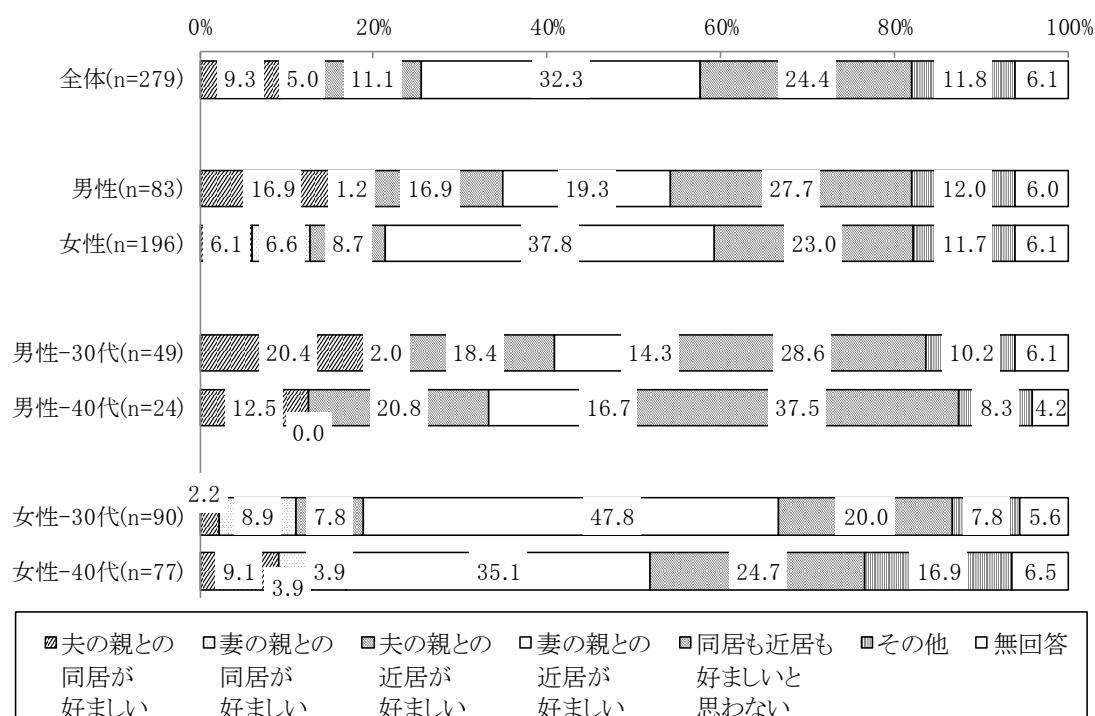
続いて、子世代のうち、現在、親と同居・近居していない 279 名に対し、家族との住まい方としてどの住まい方が理想だと思うかをたずねた結果をみる (図表 1-6)。

全体で最も多かったのは「妻の親との近居が好ましい」(32.3%)であり、「同居も近居も好ましいとは思わない」(24.4%)がこれに続いている。以下、「夫の親との近居が好ましい」(11.1%)、「夫の親との同居が好ましい」(9.3%)、「妻の親との同居が好ましい」(5.0%)の順となっており、同居が好ましいと考える人の割合は少ない傾向がうかがえる。

これらの回答結果には男女差が大きく、男性では「同居も近居も好ましいとは思わない」(27.7%)が最も多く、「妻の親との近居が好ましい」(19.3%)がこれに続く。一方、女性では「妻の親との近居が好ましい」(37.8%)が4割近くを占めて最も多く、「同居も近居も好ましいとは思わない」(23.0%)がこれに続いている。

性・年代別に比較した場合、男女差は40代より30代で大きく、女性の30代では「妻の親との近居が望ましい」と答えた人が47.8%と、男性の30代(14.3%)の3倍以上の割合を占める。一方、男性の30代では「夫の親との同居が望ましい」(20.4%)が女性の30代(2.2%)の10倍近い割合を占めている。

図表 1-6 家族の理想の住まい方 (全体、性別、性・年代別) <複数回答>



注：回答者は子世代のうち、現在、親と同居・近居していない人。性・年代別では20代と50代以上の表示を省略。

(6) 同居・近居が実現していない理由 (1Q6)

続いて、先の設問で、家族の理想の住まい方として親との同居・近居が好ましいと答えた161名に、同居・近居が現在実現していない理由をたずねた結果をみる(図表1-7)。

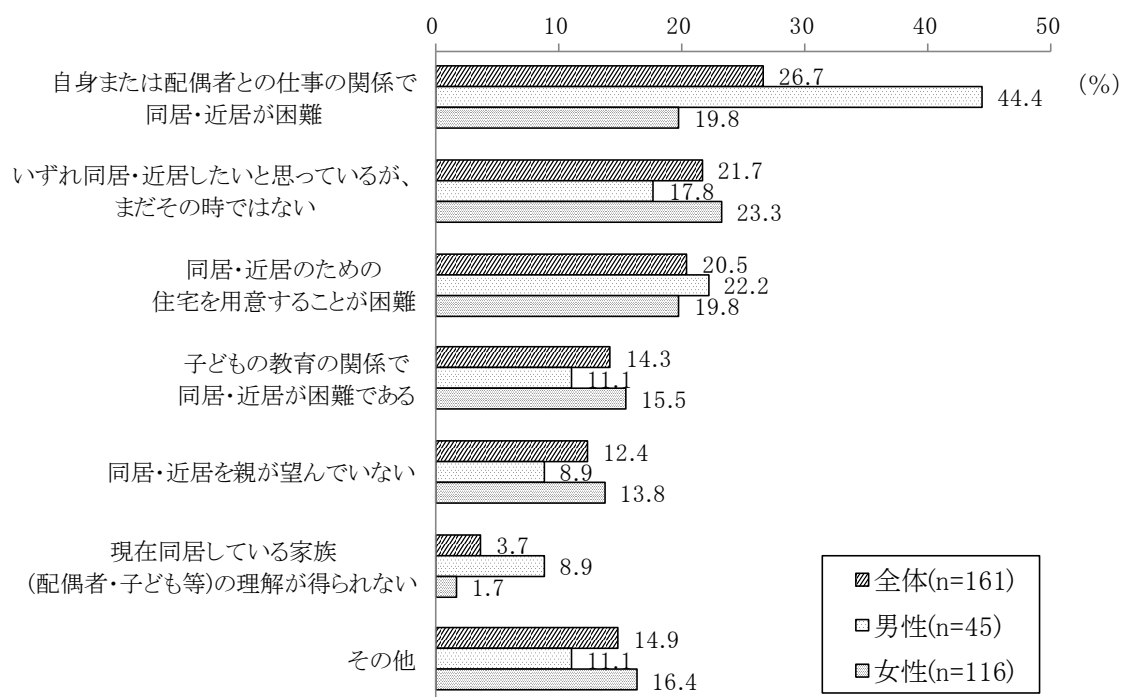
全体で最も多くあげられた理由は「自身または配偶者の仕事の関係で同居・近居が困難」(26.7%)であり、「いずれ同居・近居したいと思っているが、まだその時ではない」(21.7%)、「同居・近居のための住宅を用意することが困難」(20.5%)がこれに続いている。

「同居・近居を親が望んでいない」(12.4%)と答えた人は、「子どもの教育の関係で同居・近居が困難である」(14.3%)に次いで少ない。

性別にみると、男性では「自身または配偶者の仕事の関係で同居・近居が困難」(44.4%)が圧倒的に多く、「同居・近居のための住宅を用意することが困難」(22.2%)がこれに続いている。一方、女性では「いずれ同居・近居したいと思っているが、まだその時ではない」(23.3%)をあげた人が最も多く、男女で異なる傾向がみられる。次いで、「自身または配偶者の仕事の関係で同居・近居が困難」(19.8%)と「同居・近居のための住宅を用意することが困難」(19.8%)が同率で続いている。

男性では仕事を理由としてあげる人が圧倒的に多いのに対し、女性では仕事を理由としてあげる人と、それ以外の理由をあげる人が同程度の割合を占めていることがわかる。

図表1-7 同居・近居が実現していない理由(全体、性別) <複数回答>



注：回答者は子世代のうち、現在、親と同居・近居していない人で、家族の理想の住まい方として親との同居・近居が好ましいと答えた人。

1-2. 子との同居・近居

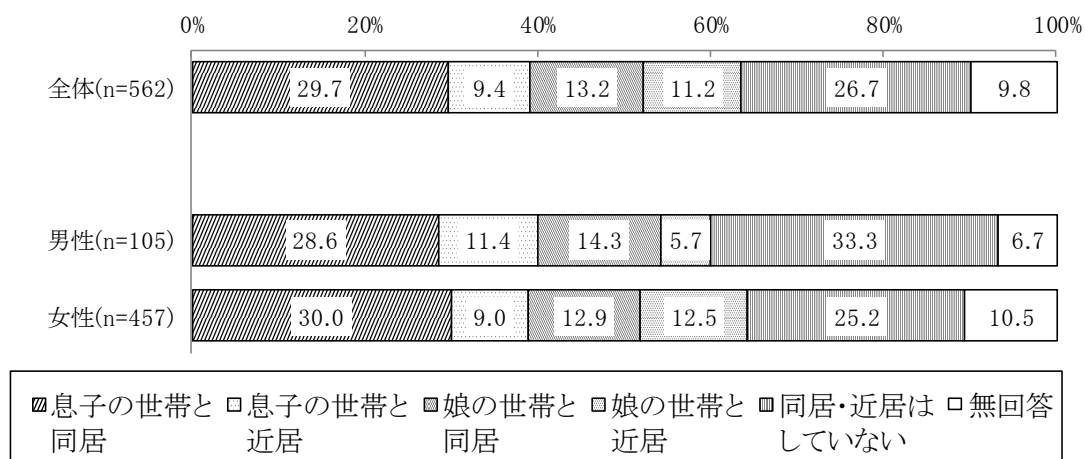
(1) 最も近くに住んでいる子との同居・近居 (2Q1)

ここでは、18歳未満の孫がいる (孫の学齢について高校生以下と答えた) 562名について (以下「親世代」)、子との同居・近居の実態をみる。

最も近くに住んでいる子との同居・近居について、全体で最も多かった回答は「息子の世帯と同居」(29.7%)であり、「同居・近居はしていない」(26.7%)がこれに続いている (図表1-8)。以下、「娘の世帯と同居」(13.2%)、「娘の世帯と近居」(11.2%)、「息子の世帯と近居」(9.4%)となっている。息子の世帯もしくは娘の世帯のいずれかと同居・近居している人は、63.5%を占めている。

性別にみても、男女とも6割前後が息子の世帯もしくは娘の世帯のいずれかと同居・近居していると答えている。

図表1-8 最も近くに住んでいる子との同居・近居 (全体、性別)



注：回答者は18歳未満の孫がいる人。

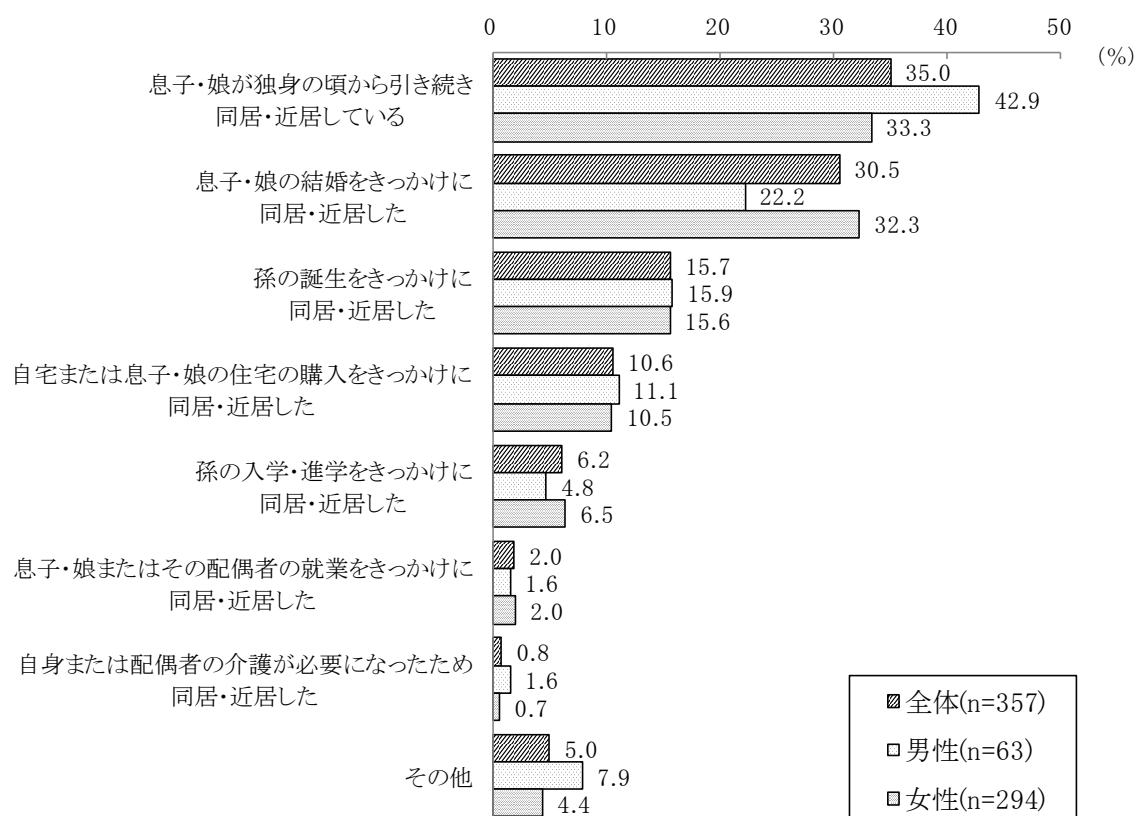
(2) 子世帯との同居・近居のきっかけ (2Q2)

現在、子世帯と同居・近居する 357 名について、同居・近居のきっかけをみる。

全体では「息子・娘が独身の頃から引き続き同居・近居している」が最も多く 35.0%を占める(図表1-9)。以下、「息子・娘の結婚をきっかけに同居・近居した」(30.5%)、「孫の誕生をきっかけに同居・近居した」(15.7%)、「自宅または息子・娘の住宅の購入をきっかけに同居・近居した」(10.6%)の順でこれに続いている。

性別に見た場合も、男女とも息子・娘が独身の頃から引き続き同居・近居している人(男性 42.9%、女性 33.3%)が最も多い。男女差が大きい項目をみると、男性では独身の頃から引き続き同居・近居している人(42.9%)が女性(33.3%)より10ポイント近く多いのに対し、女性では息子・娘の結婚をきっかけに同居・近居した人(32.3%)が男性(22.2%)より10ポイント程度多い。

図表1-9 子世帯との同居・近居のきっかけ(全体、性別) <複数回答>



注：回答者は親世代のうち、現在、子世帯と同居・近居する人。

(3) 子世帯に対して行っている子育て支援（2Q3）

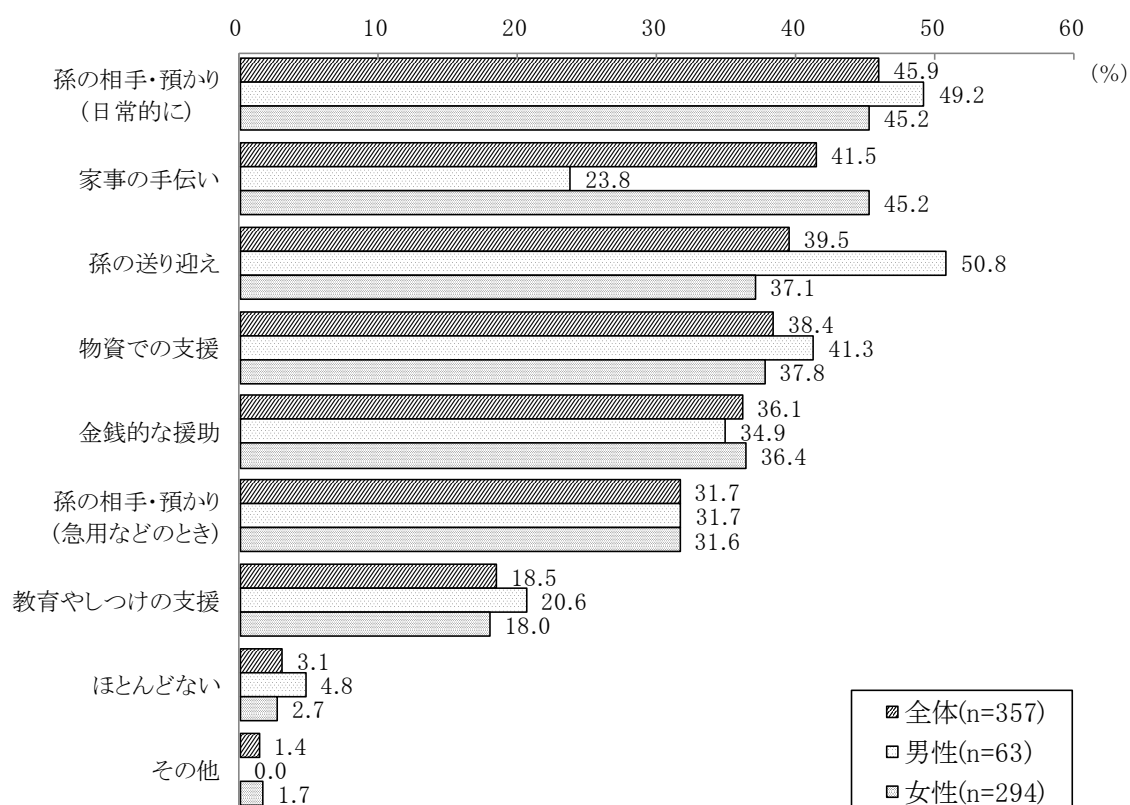
続いて、現在、子世帯と同居・近居する人が、子世帯に対して行っている子育て支援の内容をたずねた結果をみる（図表1-10）。

全体で最も多くあげられたのは、「孫の相手・預かり（日常的に）」（45.9%）であり、これに「家事の手伝い」（41.5%）、「孫の送り迎え」（39.5%）、「物資での支援」（38.4%）がこれに続く。また、日常的な場合に比べれば低い水準であるが、「孫の相手・預かり（急用などのとき）」（31.7%）、「教育やしつけの支援」（18.5%）などがこれらに続いている。

「ほとんどない」と答えた人は3.1%であったことから、ほとんどの人が何らかの形で子世帯に対して子育て支援を行っていることがうかがえる。

性別にみると、男性では「孫の送り迎え」（50.8%）をあげた人が女性（37.1%）より10ポイント以上多いのに対し、女性では「家事の手伝い」（45.2%）をあげた人が男性（23.8%）を20ポイント以上上回っている。送り迎えや家事に関しては、男女差が大きい一方、それ以外の項目では男女差はあまり見られない。

図表1-10 子世帯に対して行っている子育て支援（全体、性別）＜複数回答＞



注：回答者は親世代のうち、現在、子世帯と同居・近居する人。

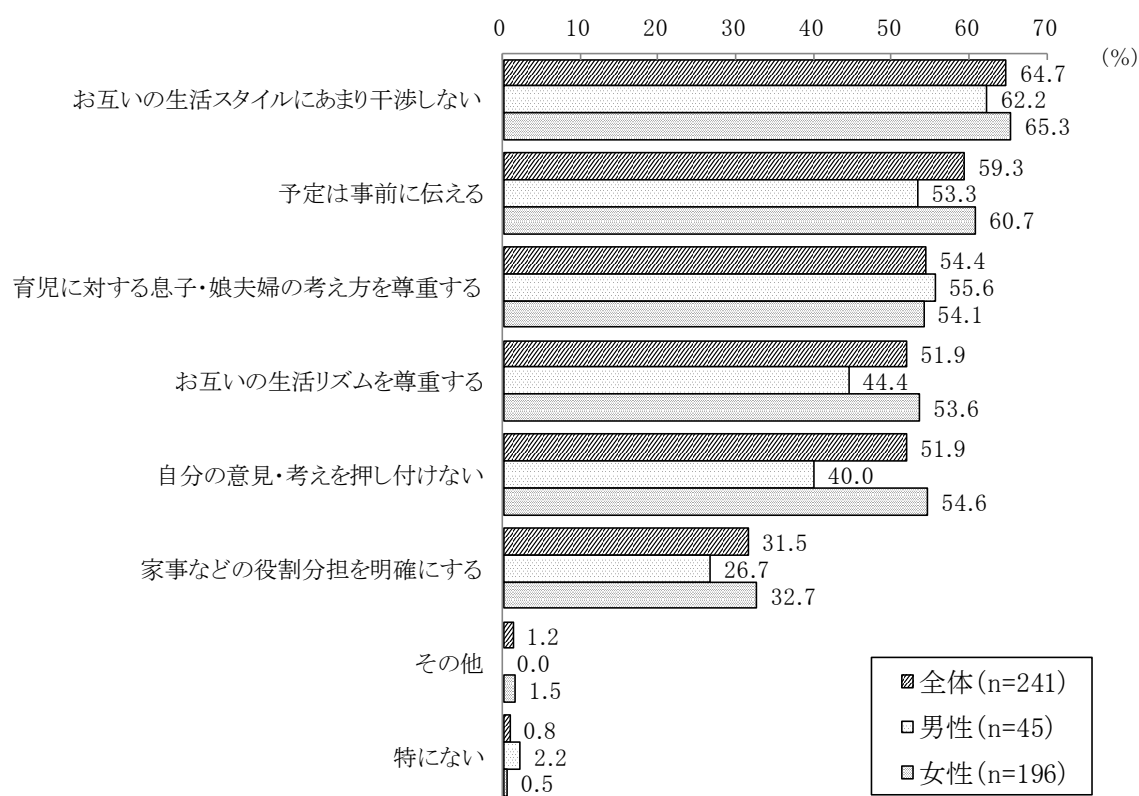
(4) 子世帯との同居で気をつけていること (2Q4)

次に、現在、子世帯と同居していると答えた 241 名について、同居していて気をつけていることについての回答結果をみる (図表 1-11)。

全体で最も多くあげられたのは、「お互いの生活スタイルにあまり干渉しない」(64.7%)という点であり、「予定は事前に伝える」(59.3%)、「育児に対する息子・娘夫婦の考え方を尊重する」(54.4%)、「自分の意見・考えを押し付けない」(51.9%)、「お互いの生活リズムを尊重する」(51.9%)がこれに続いている。「家事などの役割分担を明確にする」は31.5%で、これらに比べてやや低い水準となっている。

性別に比較した場合、ほとんどの項目において女性が男性を上回り、男女差が最も大きいのは「自分の意見・考えを押し付けない」という点であり、男性の40.0%に対し、女性では54.6%となっている。女性の方が、同居する子とのコミュニケーションに気を遣っている様子がうかがえる。

図表 1-11 子世帯との同居で気をつけていること (全体、性別) <複数回答>



注：回答者は親世代のうち、現在、子世帯と同居する人。

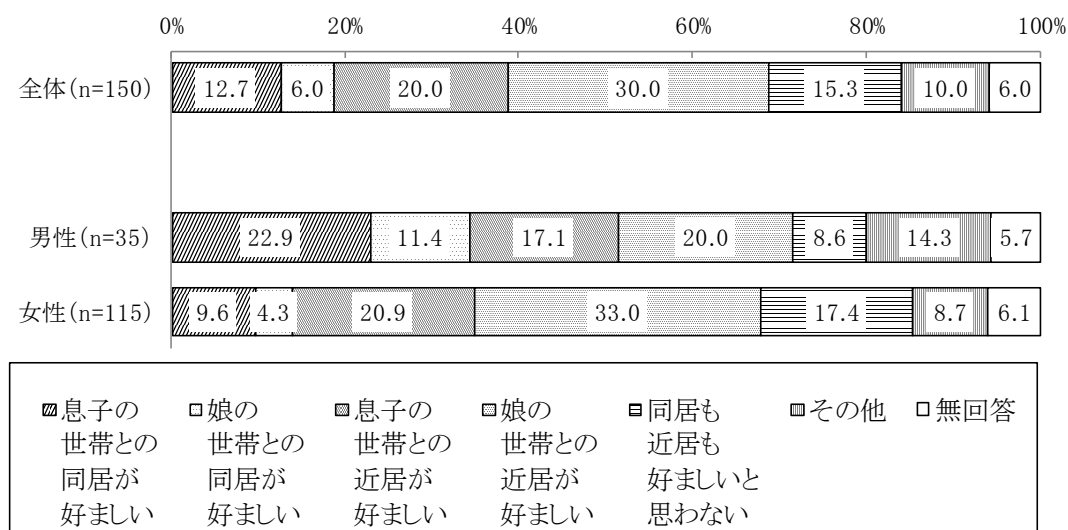
(5) 家族の理想の住まい方 (2Q5)

現在、子世帯と同居・近居していないと答えた 150 名に、家族の理想の住まい方についてたずねた結果をみる (図表 1-12)。

全体で最も多かったのは「娘の世帯との近居が好ましい」(30.0%)であり、「息子の世帯との近居が好ましい」(20.0%)、「同居も近居も好ましいと思わない」(15.3%)がこれに続いている。「息子の世帯との同居が好ましい」(12.7%)、「娘の世帯との同居が好ましい」(6.0%)と答えた人は、これらに比べて少なく、同居より近居を望ましいと考える人が多くなっている。子世帯との同居・近居が好ましいと答えた人は、合計で 68.7%であり、男性(71.4%)の方が女性(67.8%)より多くなっている。

性別にみた場合、男女にかかわらず、近居を理想とする人の方が同居を理想とする人より多くなっているが、こうした傾向は女性でより顕著となっている。子世帯との同居を理想とする人は、男性の 34.3%に対し、女性では 13.9%、子世帯との近居を理想とする人は男性の 37.1%に対し、女性では 53.9%を占める。ただし、女性の場合、「同居も近居も好ましいと思わない」と答えた人も男性より 10 ポイント近く高い。

図表 1-12 家族の理想の住まい方 (全体、性別)



注：回答者は親世代のうち、現在、子世帯と同居・近居していない人。

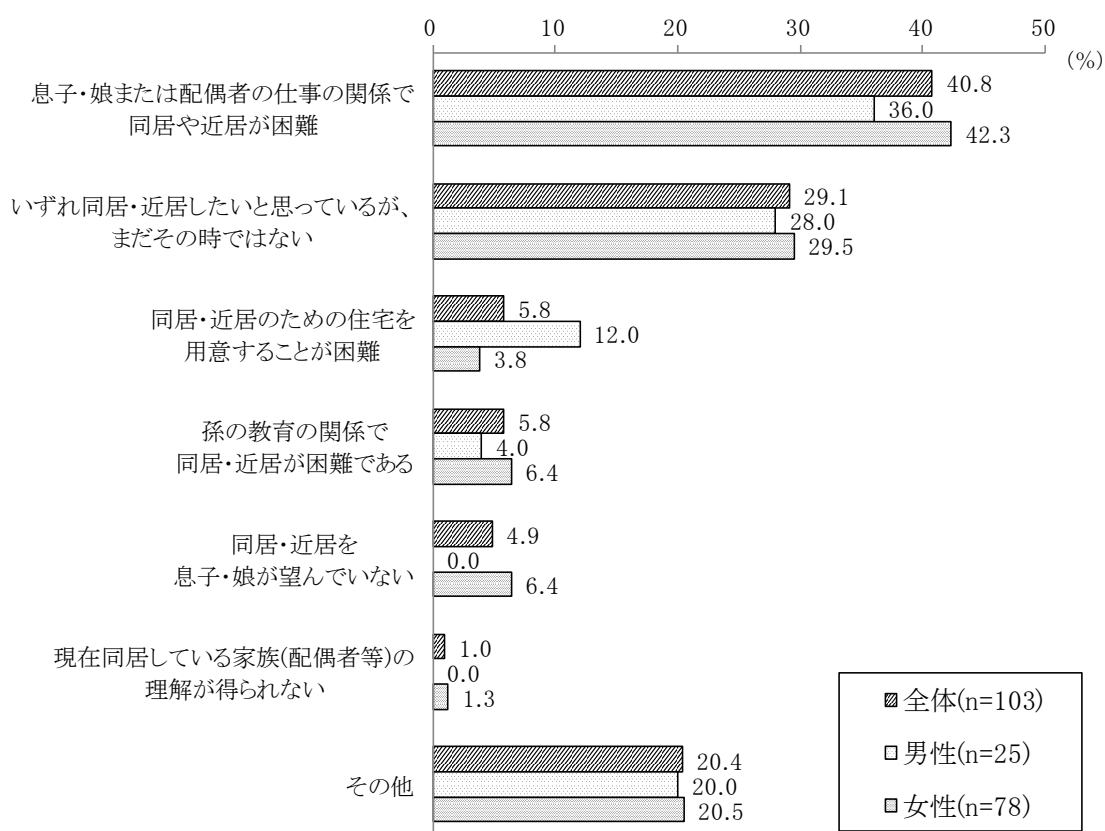
(6) 同居・近居が実現していない理由 (2Q6)

続いて、現在子世帯とは同居・近居しておらず、先の設問で家族の理想の住まい方として子世帯との同居・近居が好ましいと答えた 103 名に、同居・近居が現在実現していない理由をたずねた結果をみる (図表 1-13)。

全体で最も多くあげられた回答は、「息子・娘または配偶者の仕事の関係で同居や近居が困難」(40.8%) であり、「いずれ同居・近居したいと思っているが、まだその時ではない」(29.1%) がこれに続いている。

性別にみると、最も男女差が大きかったのは「同居・近居のための住宅を用意することが困難」であり、男性 (12.0%) が女性 (3.8%) の 3 倍以上の割合を占める。ただ、この点を理由としてあげた人の割合は、「息子・娘または配偶者の仕事の関係で同居・近居が困難」や「いずれ同居・近居したいと思っているが、まだその時ではない」をあげた人に比べると大幅に低い。

図表 1-13 同居・近居が実現していない理由 (全体、性別) <複数回答>



注：回答者は親世代のうち、現在、子世帯と同居・近居していない人で、家族の理想の住まい方として子世帯との同居・近居が好ましいと答えた人。

1-3. 同居・近居のメリット・デメリット

(1) 三世帯同居・近居のメリット

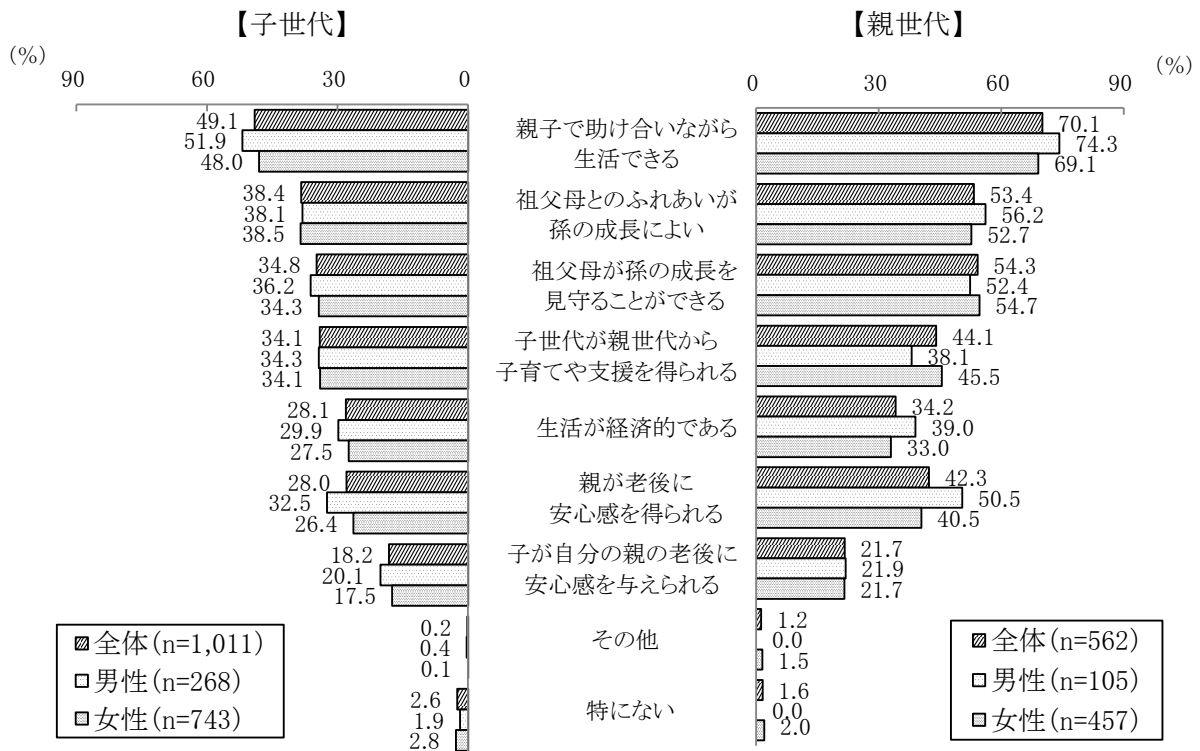
①三世帯同居のメリット (Q7-1)

ここでは 18歳未満の子どもがいる人(子世代)、18歳未満の孫がいる人(親世代) のそれぞれについて、三世帯同居・近居のメリットについてたずねた結果をみる。

まず、三世帯同居のメリットについての回答結果をみる(図表1-14)。子世代全体で最も多くあげられた点は「親子で助け合いながら生活できる」(49.1%)であり、「祖父母とのふれあいが孫の成長によい」(38.4%)、「祖父母が孫の成長を見守ることができる」(34.8%)「子世代が親世代から子育てや支援を得られる」(34.1%)などがこれに続いている。

これらの上位4項目は、親世代の回答と共通するが、いずれの回答割合も親世代が子世代を大きく上回っている。例えば、「親子で助け合いながら生活できる」とした人は、子世代(49.1%)に対し親世代が70.1%、「祖父母が孫の成長を見守ることができる」では子世代(34.8%)に対し親世代が54.3%など、中には20ポイント前後の差がみられる項目もある。全般に、親世代の方が、子世代よりメリットと考えている人の割合が高い傾向にある。

図表1-14 三世帯同居のメリット(全体、性別) <複数回答>



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人、及び、18歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。なお、調査票には「現在同居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

性別に比較した場合、これらをあげる割合に大きな男女差はみられないが、「親が老後に安心感を得られる」と答えた人の割合は、子世代と親世代の双方で男性が女性を 5 ポイント以上上回っており、三世代同居が親の老後の安心感という点においてメリットがあると考えられる傾向は、親子両世代に共通して、女性より男性でやや強くみられる。

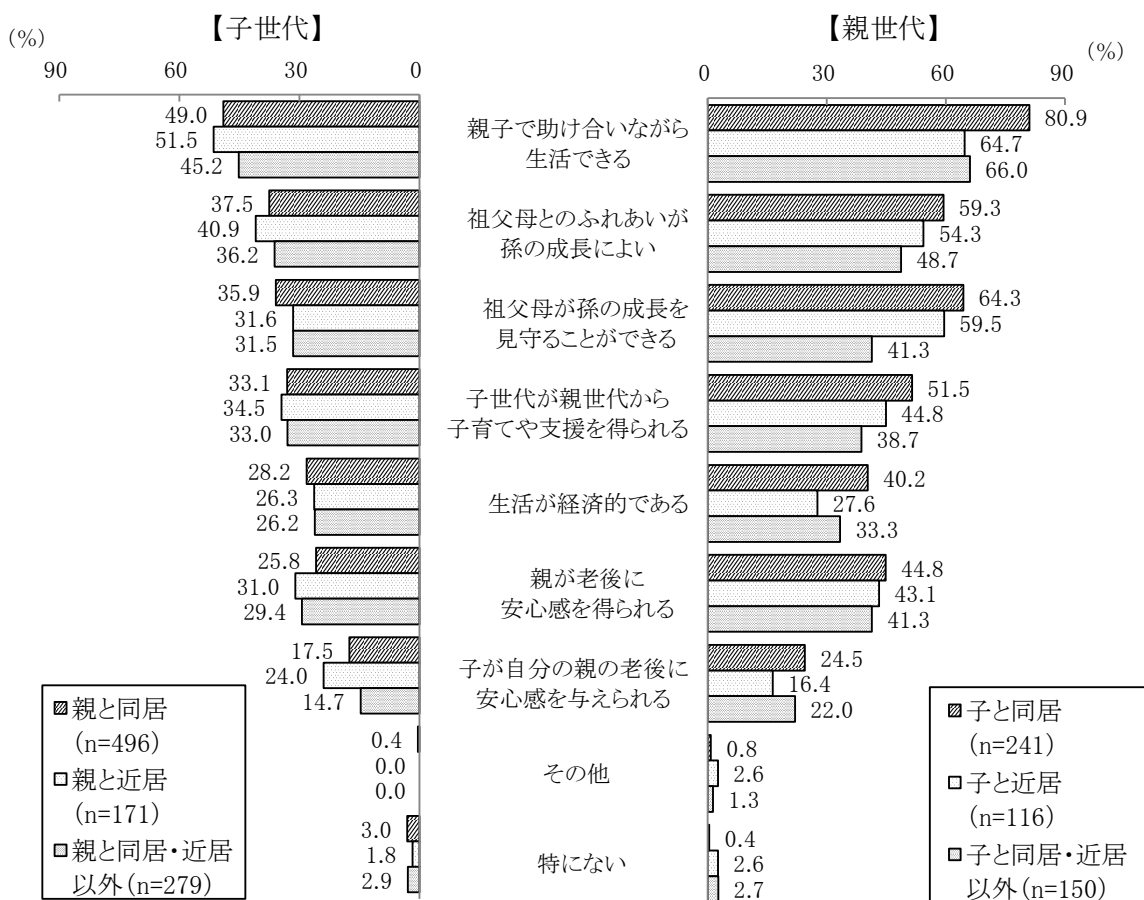
では、実際に現在親と同居・近居する子世代と、していない子世代、あるいは実際に現在子世帯と同居・近居する親世代と、していない親世代ではこれらの回答結果にどのような違いがみられるのだろうか（図表 1-15）。

子世代の場合、実際に現在親と同居する人の回答割合が、親と近居する人や親と同居・近居以外の人を上回ったのは「祖父母が孫の成長を見守ることができる」（35.9%）と「生活が経済的である」（28.2%）である。これ以外の項目では、親との同居・近居の有無によってそれほど大きな差はみられないものの、「親が老後に安心感を得られる」では、親と近居する人（24.0%）が親と同居する人（17.5%）や同居・近居以外の人（14.7%）を大きく上回っている。親と近居する人からみた場合、親との同居は「親が老後に安心感を得られる」と考えられているが、実際に親と同居する人で、この項目をメリットだと考える人はそれほど多くない傾向がうかがえる。

これに対して親世代の場合、子世帯と近居する人や子世帯と同居・近居以外の人に比べて全ての項目で子世帯と同居する人の回答割合が高い。例えば、子世帯と同居する人では、「親子で助け合いながら生活できる」が 80.9%と、子世帯と近居する人（64.7%）や同居・近居以外の人（66.0%）を 10 ポイント以上上回っている。また、子世帯と同居する人では、「祖父母が孫の成長を見守ることができる」が 64.3%を占めるが、この点については子世帯と近居する人も 59.5%と、同居・近居以外の人（41.3%）を 10 ポイント以上上回っている。親子で助け合いながら生活できるという点は、実際に子世帯と同居する親世代の多くが同居のメリットだと実感しており、孫の成長を見守ることができるという点は、子世帯と同居する人が実感するとともに、子世帯と近居する親世代からみても同居のメリットだと考えられていることがわかる。

なお、子世代と親世代の回答結果を比較すると、いずれの項目に関しても、親世代の割合が子世代を大きく上回っている。親子の同居・近居の有無にかかわらず、親世代の方が、三世代同居にはメリットがあると考えている傾向がうかがえる。

図表 1-15 三世代同居のメリット（親子の同居・近居有無別）＜複数回答＞



注：回答者は 18 歳未満の子どもがいる人、及び、18 歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね 2 km 以内」とした。なお、調査票には「現在同居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

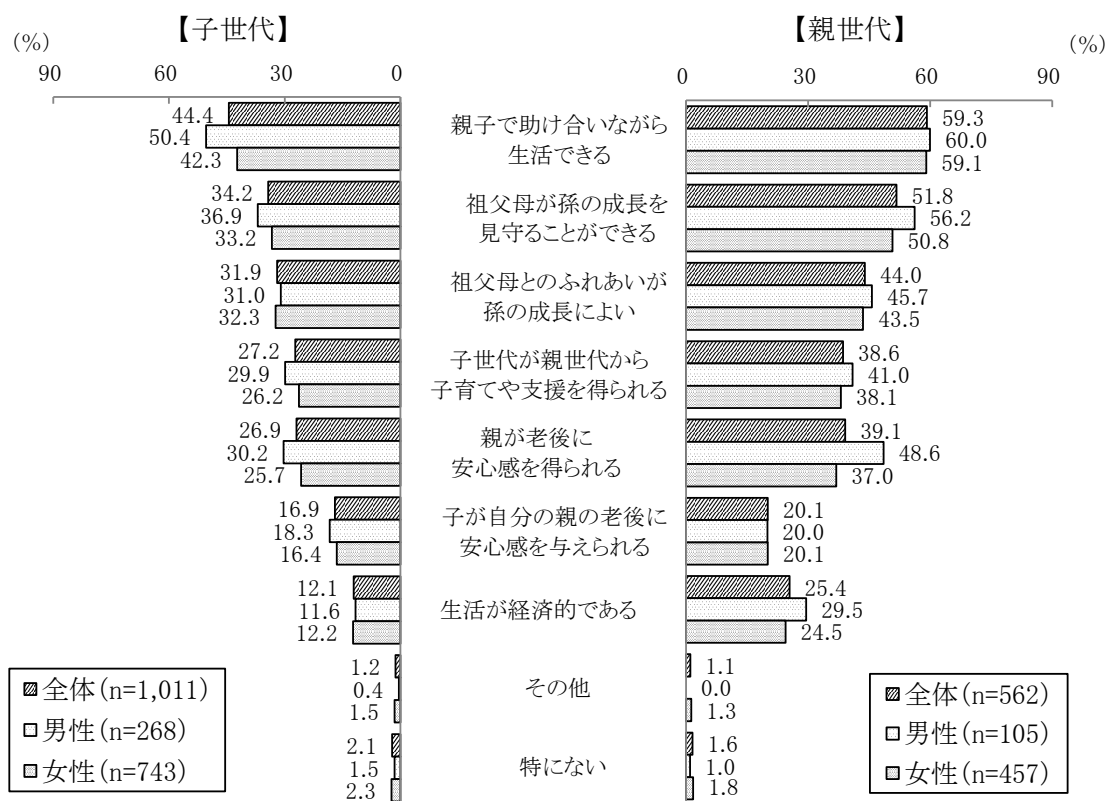
②三世代近居のメリット (Q8-1)

次に、近居のメリットについての回答結果をみる (図表1-16)。

子世代全体で最も多くあげられた項目は「親子で助け合いながら生活できる」(44.4%)であり、「祖父母が孫の成長を見守ることができる」(34.2%)「祖父母とのふれあいが孫の成長によい」(31.9%)がこれに続いている。男女を比較すると、多くの項目で男性が女性を上回っている。子世代では、男性の方が女性より近居のメリットを感じている人が多い傾向にあるといえる。

親世代の回答をみると、多くの項目で子世代を上回り、三世代同居のメリットについての回答結果と同様の傾向である。とりわけ親世代の男性では、近居のメリットをあげる人の割合が高く、「親が老後に安心感を得られる」では女性の37.0%に対し、男性では48.6%を占める。

図表1-16 三世代近居のメリット (全体、性別) <複数回答>



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人、及び、18歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。なお、調査票には「現在近居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

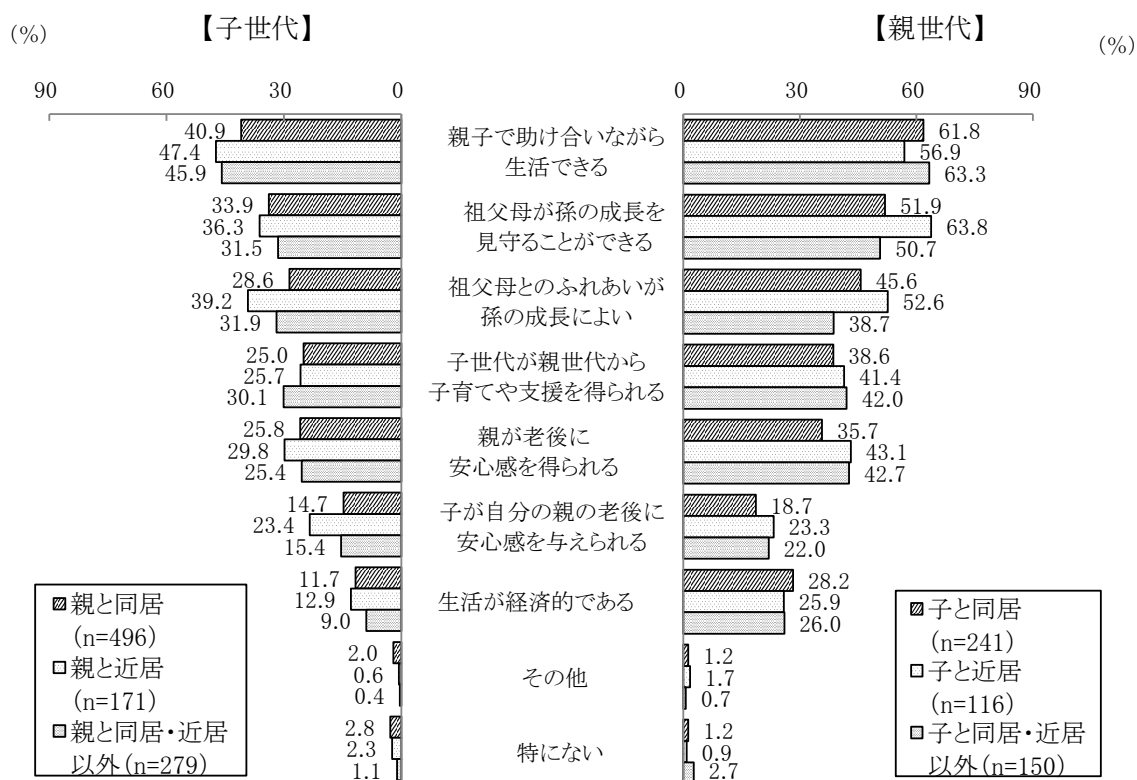
では、これらの回答結果には、実際に現在同居・近居する人としていない人でどのような違いがみられるのだろうか（図表1-17）。

まず、子世代の回答結果をみると、実際に現在親と近居する人では、親と同居する人や同居・近居以外の人に比べて、多くの項目で回答割合が高い傾向がある。中でも「祖父母とのふれあいが孫の成長によい」では、親と近居する人（39.2%）が、親と同居する人（28.6%）を10ポイント以上も上回っている。

一方、親世代の回答結果においても、実際に現在子世帯と近居する人では、子世帯と同居する人や同居・近居以外の人に比べて、多くの項目で回答割合が高い傾向がみられる。中でも、「祖父母が孫の成長を見守ることができる」では、子世帯と近居する人（63.8%）が、子世帯と同居する人（51.9%）を10ポイント以上も上回っている。親と近居する子世代では孫の成長にとって祖父母との交流を、子世帯と近居する親世代では祖父母が孫の成長を見守ることを、それぞれ近居のメリットであると強く感じていることがわかる。

なお、実際に現在近居しているかどうかにかかわらず、ほぼすべての項目で親世代の回答割合が子世代を上回っており、三世帯近居にメリットがあると考えられる傾向は、同居と同様に、子世代より親世代でより強いことがうかがえる。

図表1-17 三世帯近居のメリット（親子の同居・近居有無別）＜複数回答＞



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人、及び、18歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。なお、調査票には「現在同居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

③同居・近居のメリット比較（Q7-1、Q8-1）

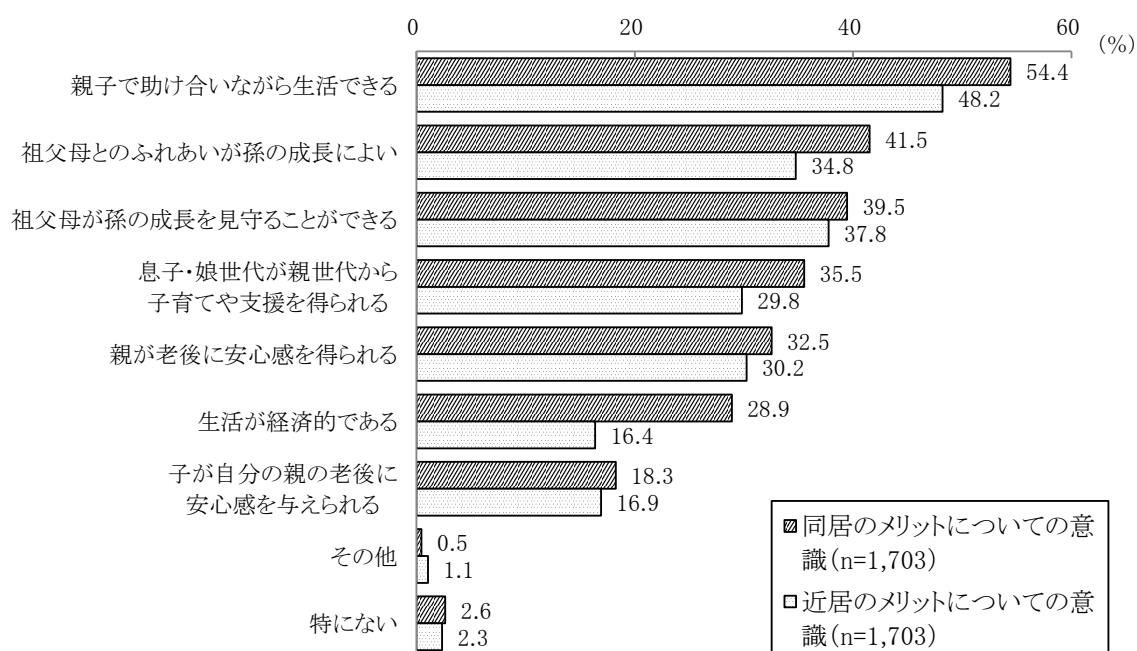
次に、回答者全体の同居・近居のメリットに関する意識を比較してみる（図表1-18）。

同居のメリットとして、最も多くあげられたのは「親子で助け合いながら生活できる」（54.4%）であり、「祖父母とのふれあいが孫の成長によい」（41.5%）、「祖父母が孫の成長を見守ることができる」（39.5%）などがこれに続いている。すべての項目において、近居のメリットとしてあげられた割合を、同居のメリットが上回っている。近居に比べて、同居に関しての方がメリットがあると感じる人がやや多い傾向にある。

また、「特にない」と答えた人は、同居のメリットで2.6%、近居のメリットで2.3%にとどまる。同居・近居とも、何らかの形でメリットがあると考える人が大半を占めることがうかがえる。

なお、同居と近居の差がもっとも大きかったのは「生活が経済的である」である（同居28.9%、近居16.4%）。近居の場合、生活の経済性という点に関しては、同居ほどのメリットは感じない人が多いようである。

図表1-18 同居・近居のメリットについての意識（全体）＜複数回答＞



注：回答者全体では、子どもや孫の学齢が無回答のものなども含めて集計しているため、18歳未満の子どもがいる人と18歳未満の孫がいる人との合計とは合わない。

(2) 三世同居・近居のデメリット (Q7-2、Q8-2)

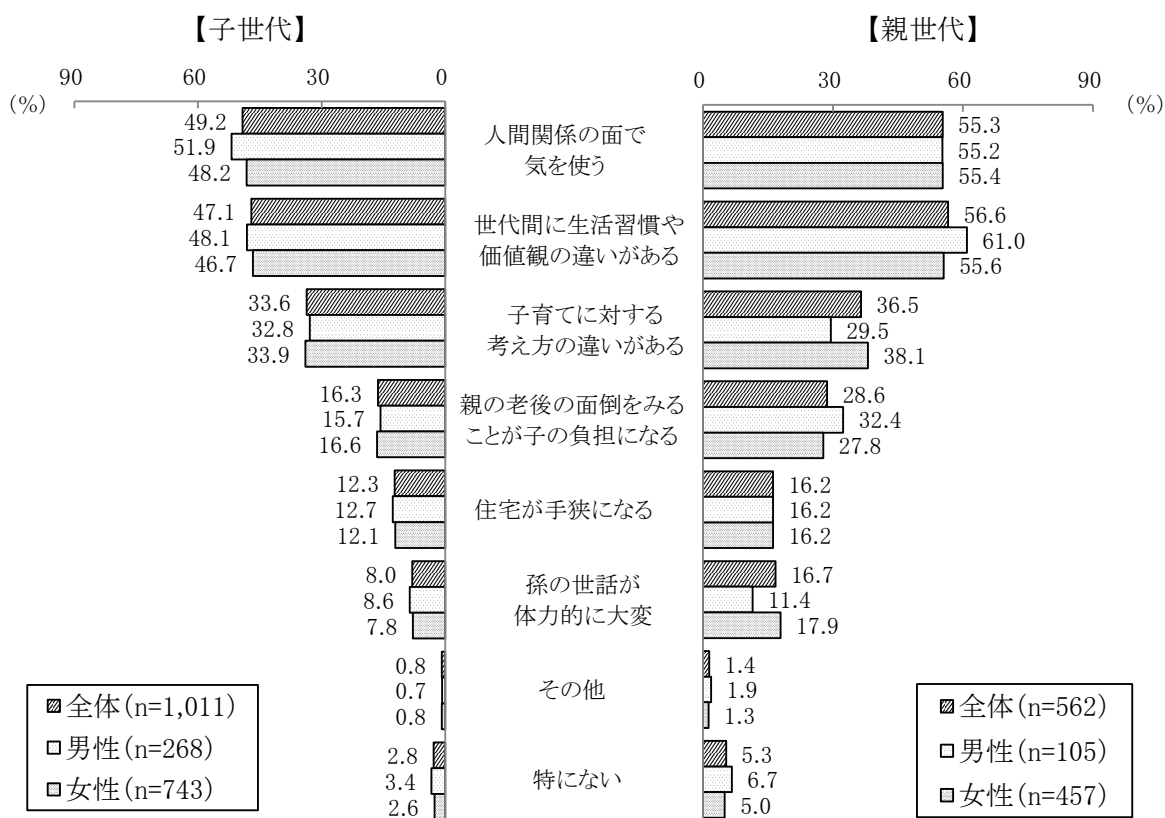
①三世同居のデメリット

次に、三世同居のデメリットについてたずねた結果をみる (図表1-19)。

子世代全体で最も多くあげられた項目は「人間関係の面で気を使う」(49.2%)であり、「世代間に生活習慣や価値観の違いがある」(47.1%)が僅差でこれに続いている。また、「子育てに対する考え方の違いがある」(33.6%)をあげた人も、比較的多い。「特にない」と答えた人は5%に満たないことから、ほとんどの人が三世同居には何らかのデメリットがあると考えていることがわかる。

これらの回答結果には性別による大きな違いはみられないが、ほぼすべての項目に関して、親世代の回答割合が子世代の回答割合を上回っており、親世代の方が三世同居についてさまざまなデメリットをあげる人の割合が高い傾向がみられる。

図表1-19 三世同居のデメリット (全体、性別) <複数回答>



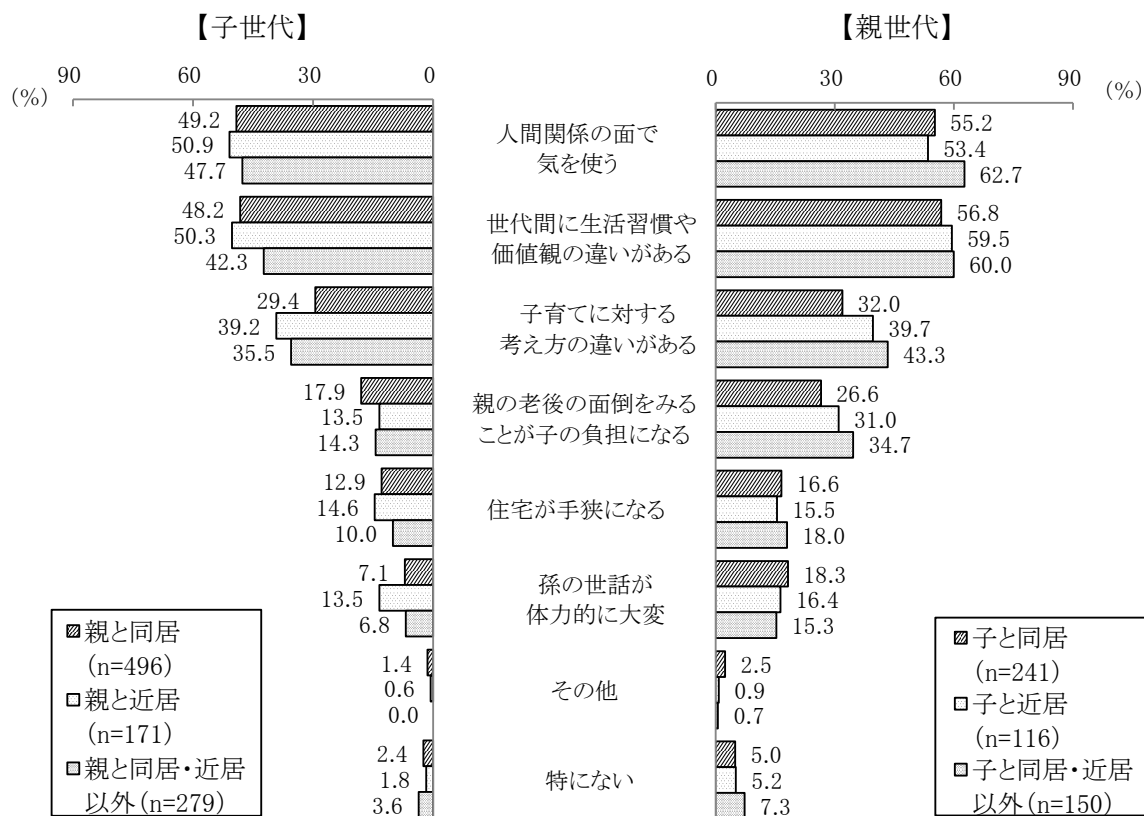
注：回答者は18歳未満の子どもがいる人、及び、18歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。なお、調査票には「現在同居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

では、実際に現在親と同居・近居する子世代としていない子世代、あるいは実際に現在子世帯と同居・近居する親世代としていない親世代では、これらの回答結果にどのような違いがみられるのだろうか（図表1-20）。

まず、子世代の回答結果をみると、親と近居する人の回答割合が、親と同居する人や、同居・近居していない人の回答割合を多くの項目で上回っている。「子育てに対する考え方の違いがある」や「孫の世話が体力的に大変」では、近居の人（39.2%、13.5%）が、同居の人（29.4%、7.1%）を5ポイント以上上回っており、親と近居する人からみた場合に、実際に同居している人よりも強くデメリットととらえる傾向がみられる。

一方、親世代の回答結果をみると、子と同居・近居していない人の回答割合が、子と同居・近居する人よりも多くの項目で上回っており、三世帯同居にはさまざまなデメリットがあると考えていることが、実際に同居をしていない理由の1つであることがうかがえる。

図表1-20 三世帯同居のデメリット（親子の同居・近居有無別）＜複数回答＞



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人、及び、18歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。なお、調査票には「現在同居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

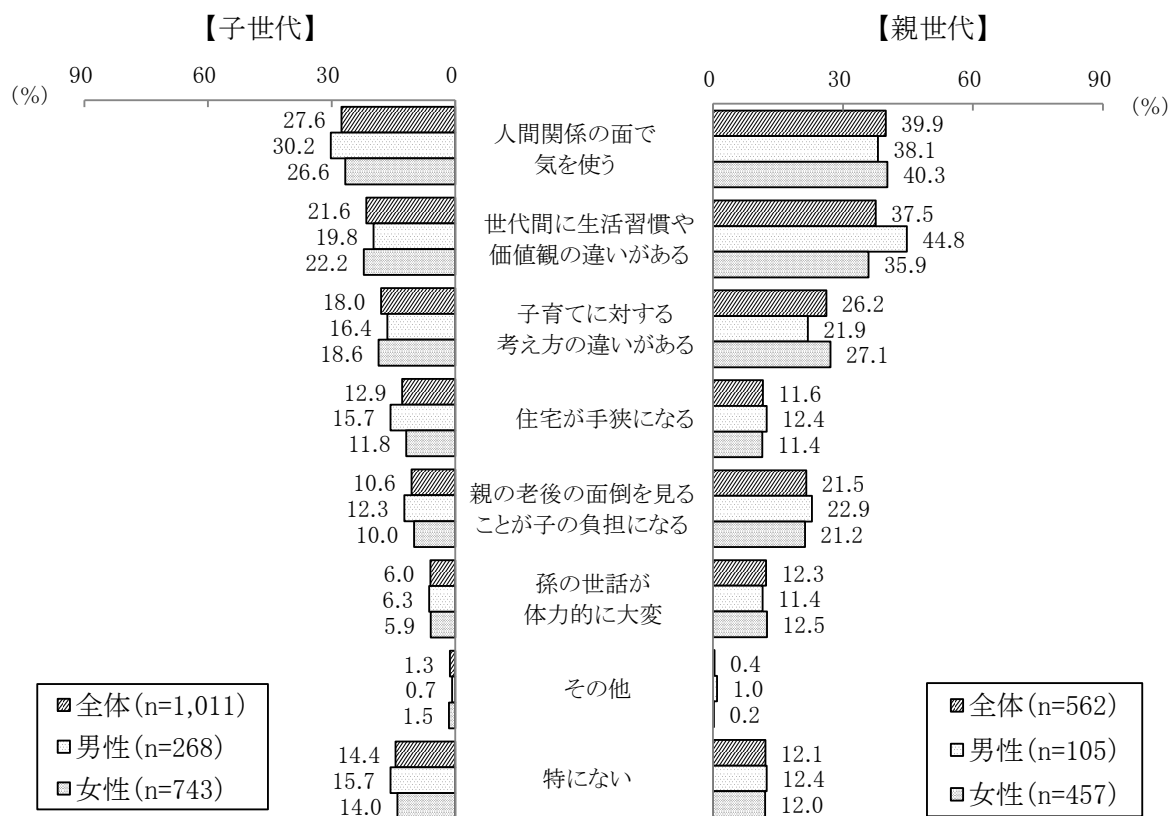
②三世代近居のデメリット

続いて、三世代近居のデメリットについての回答結果をみる。

まず、子世代の回答結果をみると、最も多くあげられたのは「人間関係の面で気を使う」(27.6%)であり、「世代間に生活習慣や価値観の違いがある」(21.6%)、「子育てに対する価値観の違いがある」(18.0%)がこれに続いている(図表1-21)。ただし、回答割合は最も高い「人間関係の面で気を使う」でも3割弱であり、全般に低い。性別にみても、男女で大きな差がみられる項目はない。

一方、親世代の回答結果をみると、ほとんどの項目で子世代の回答割合を上回っている。例えば、最も多くあげられた「人間関係の面で気を使う」では、親世代(39.9%)の回答割合が子世代(27.6%)を10ポイント以上も上回っている。

図表1-21 三世代近居のデメリット(全体、性別) <複数回答>



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人、及び、18歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。なお、調査票には「現在近居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

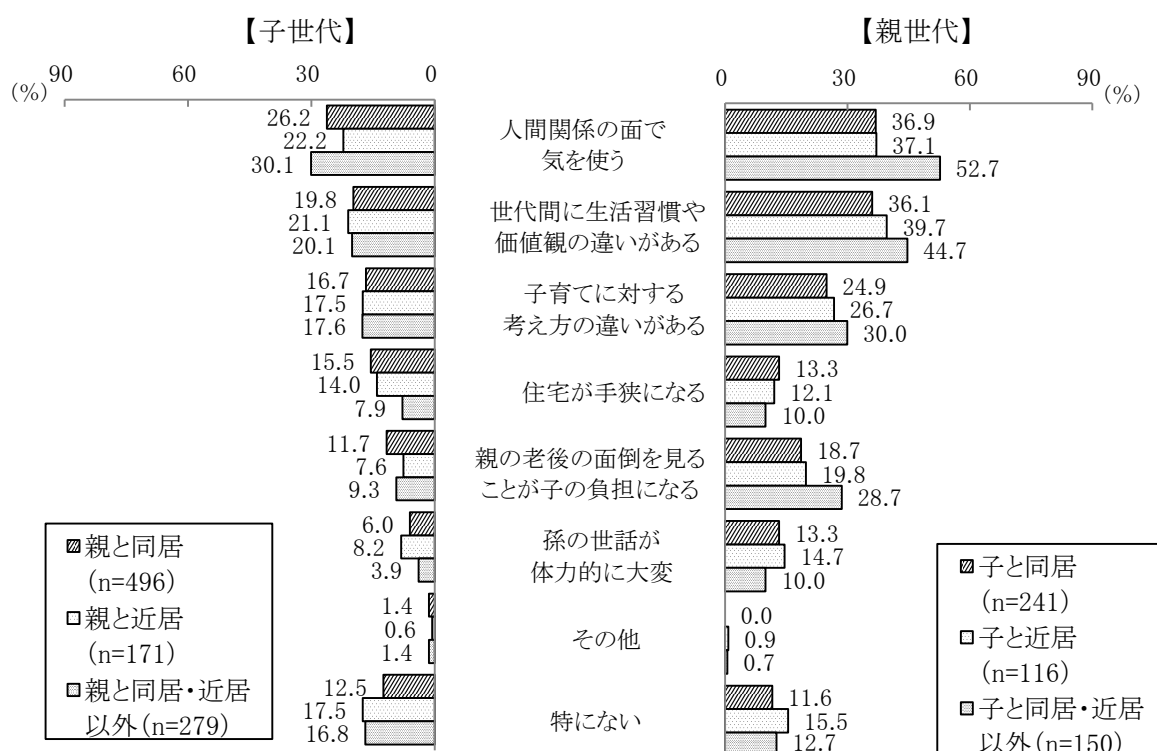
では、実際に現在親と同居・近居する子世代としていない子世代、あるいは実際に現在子世帯と同居・近居する親世代としていない親世代ではこれらの回答結果にどのような違いがみられるのだろうか（図表1-22）

まず、子世代の回答結果をみると、実際に現在親と同居する人では「人間関係の面で気を使う」をあげた人（22.2%）が、親と同居する人（26.2%）や同居・近居以外の人（30.1%）に比べて低い割合にとどまっている。実際に親と同居する子世代で「人間関係の面で気を使う」ことを近居のデメリットだと考える人は、親と同居する人や親と同居・近居していない人に比べて少ないことがわかる。

また、子世代では、親と同居する人や、親と同居・近居していない人において「特にない」と答えた人が2割弱を占めた。このことから、親と同居する人や、親と同居・近居していない人では、親と同居する人に比べて、近居にデメリットはないと考える人が多いことがわかる。

一方、親世代の回答をみると、多くの項目で子世帯と同居・近居していない人の回答割合が最も高く、中でも「人間関係の面で気を使う」では、子と同居・近居以外（52.7%）の割合が、親と同居（36.9%）、親と近居（37.1%）を10ポイント以上も上回っている。子世帯と同居・近居していない人の方が、子世帯と同居・近居する人に比べて「人間関係の面で気を使う」ことを三世帯近居のデメリットとしてとらえる傾向が強い。

図表1-22 三世帯近居のデメリット（親子の同居・近居有無別）＜複数回答＞



注：回答者は18歳未満の子どもがいる人、及び、18歳未満の孫がいる人。本書では、近居とは「直線距離で片道おおむね2km以内」とした。なお、調査票には「現在近居していない人は、イメージでお答えください」と記している。

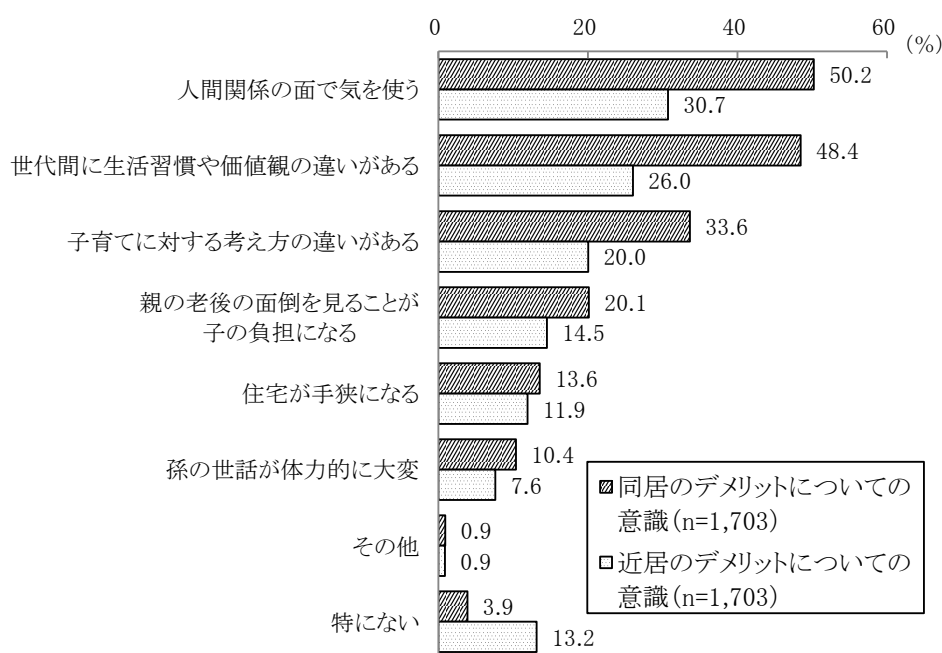
③同居・近居のデメリット比較（Q7-2、Q8-2）

では次に、回答者全体の同居・近居のデメリットに関する意識を比較してみる（図表1-23）。

同居のデメリットとして、最も多くあげられたのは「人間関係の面で気を使う」（50.2%）であり、「世代間に生活習慣や価値観の違いがある」（48.4%）、「子育てに対する考え方の違いがある」（33.6%）などがこれに続いている。すべての項目で、近居のデメリットとしてあげられた割合を同居が上回り、「特にない」についても近居が同居を10ポイント近く上回っている。近居に比べて、同居にデメリットを感じる人が多い傾向にある。

なお、同居と近居の差が20ポイント前後みられるのは「人間関係の面で気を使う」と「世代間に生活習慣や価値観の違いがある」の2項目である。親子両世帯が各々の生活空間を確保できる近居は、人間関係や生活習慣、意識等の違いが同居ほど問題にならないと考える人が多いことがうかがえる。

図表1-23 同居・近居のデメリットについての意識（全体）＜複数回答＞



注：回答者全体では、子どもや孫の年齢が無回答のものなども含めて集計しているため、18歳未満の子どもがいる人と18歳未満の孫がいる人との合計とは合わない。

1-4. 行政に望む施策

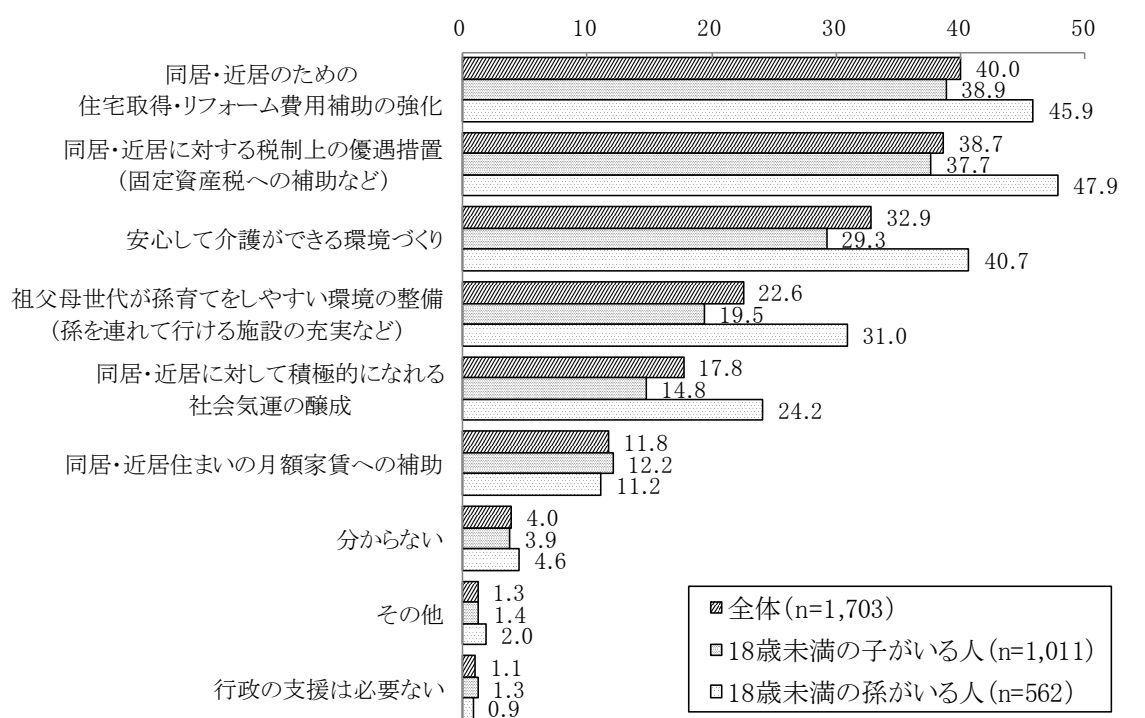
(1) 家族の絆で支え合う暮らしの促進に向けて行政に望む施策（Q9）

最後に、三世代同居・近居など三世代による家族の絆で支え合う暮らしの促進に向けて、行政に対しどのような施策を望むかについての回答結果をみる（図表1-24）。

まず、全体で最も多くあげられたのは「同居・近居のための住宅取得・リフォーム費用補助の強化」（40.0%）であり、「同居・近居に対する税制上の優遇措置（固定資産税への補助）」（38.7%）が僅差でこれに続いている。また、これら2項目に比べるとやや低い割合にとどまっているが、「安心して介護ができる環境づくり」（32.9%）や「祖父母世代が孫育てをしやすい環境の整備（孫を連れて行ける施設の充実）」（22.6%）についても、比較的多くあげられている。

一方、18歳未満の孫がいる人（親世代）でも、「同居・近居に対する税制上の優遇措置」（47.9%）と「同居・近居のための住宅取得・リフォーム費用補助の強化」（45.9%）が上位2項目となっているが、「安心して介護ができる環境づくり」（40.7%）をあげる人も4割を超える。また、18歳未満の子がいる人（子世代）においても、「同居・近居のための住宅取得・リフォーム費用補助の強化」（38.9%）と「同居・近居に対する税制上の優遇措置」（37.7%）が上位2項目となっているが、いずれの割合も親世代に比べると低い水準にとどまっている。また、「安心して介護ができる環境づくり」（29.3%）をあげた人は、親世代（40.7%）に比べて、10ポイント以上低くなっている。

図表 1-24 家族の絆で支え合う暮らしの促進に向けて行政に望む施策
 (全体、18歳未満の子がいる人、18歳未満の孫がいる人) <複数回答>



注：全体では、子どもや孫の学齢が無回答のものなども含めて集計しているため、18歳未満の子どもがいる人と18歳未満の孫がいる人との合計とは合わない。

ほとんどの項目で、親世代の回答が子世代の回答を上回っていることから、子世代に比べて、親世代の方が三世代による家族の絆で支え合う暮らしの促進施策を望む傾向が強いことがうかがえる。

このようななか、親世代が「安心して介護ができる環境づくり」をあげた割合 (40.7%) は、子世代より 11 ポイント以上高く、自身の老後の介護等が子の負担になると懸念する人が少なくないことがうかがえる。

1-5. まとめ

(1) 親との同居・近居

本調査に回答した 18歳未満の子どもがいる人（子世代） では、親と同居・近居している人が3分の2（66%）を占め、していない人を大幅に上回っている。最も多いのは、「夫の親との同居」（37.6%）となっている。

親との同居・近居のきっかけをみると、男性では結婚前からの継続と結婚がきっかけになっているケースが多く、女性では結婚がきっかけとなっているケースが圧倒的に多い。

また、親と同居・近居する子世代の多くが「子どもの相手・預かり」「家事の手伝い」「子どもの送り迎え」など、さまざまな形で親から子育て支援を受けている。

このようななか、親と同居する子世代の多くが、「予定は事前に伝える」「お互いの生活スタイルにあまり干渉しない」「お互いの生活リズムを尊重する」「育児支援などに対する感謝はしっかり伝える」など生活のさまざまな面で気をつけていることがあると答えている。こうした気遣いは男性より女性で多く、同居する親とのコミュニケーションに関しては女性の方がより気を遣っている様子がうかがえる。

また、現在親と同居・近居していない子世代に理想の住まい方をたずねた結果では、妻の親との近居がもっとも多く、特に女性にその傾向が強くみられた。

(2) 子との同居・近居

本調査に回答した 18歳未満の孫がいる人（親世代） では、子世帯と同居・近居している人が63.5%を占め、していない人を上回っている。最も多いのは「息子の世帯との同居」（29.7%）となっている。

子世帯との同居・近居のきっかけをみると、男女とも子の結婚前からの継続が最も多い。

また、子世帯と同居・近居する親世代の多くが「孫の相手・預かり」「家事の手伝い」「孫の送り迎え」など、さまざまな形で子世帯の子育てを支援している。男性では「孫の送り迎え」、女性では「家事の手伝い」が多い一方、「孫の預かり」や「金銭的な援助」、「物資での支援」などでは男女差はみられない。

このようななか、子世帯と同居する親世代の多くが、「お互いの生活スタイルにあまり干渉しない」「予定は事前に伝える」「育児に対する息子・娘夫婦の考え方を尊重する」など生活のさまざまな面で気をつけていることがあると答えている。こうした気遣いは男性より女性の方が多い傾向がみられ、同居する子とのコミュニケーションに関しては女性の方がより気を遣っている様子がうかがえる。

また、現在子世帯と同居・近居していない親世代に理想の住まい方をたずねた結果では、子世帯との近居が好ましいとする人が多く、特に女性にその傾向が顕著にみられる。

(3) 同居・近居のメリット・デメリット

一般的に三世代が同居・近居する家族では、親子の助け合いによって、子世代が家事や子育てに親の手助けを得たり、親世代が老後に安心感を得られるなどさまざまなメリットあると考えられる。一方で、三世代の同居・近居には、人間関係の気遣いや価値観の違いなど、さまざまなデメリットも想定される。

今回の調査では、実際に親や子と同居・近居している人が同居・近居のメリット・デメリットについてどのように感じているか、また実際には同居・近居していない人が、同居・近居にどのようなイメージを持っているのかを分析した。

①メリット

18歳未満の子どもがいる子世代、および18歳未満の孫がいる親世代の双方とも、三世代同居・近居には「親子で助け合いながら生活できる」「子世代が親世代から子育てや支援を得られる」「祖父母が孫の成長を見守ることができる」「祖父母とのふれあいが孫の成長によい」「親が老後に安心感を得られる」などといった多様なメリットがあると考えていることがうかがえる。

また、これらのメリットがあると感じている人は、子世代より親世代の方が多く、また近居より同居に関してメリットを感じる割合がやや多かった。

②デメリット

一方、デメリットとしては、とりわけ三世代同居に関して「人間関係の面で気を使う」「世代間に生活習慣や価値観の違いがある」「子育てに対する考え方の違いがある」「親の老後の面倒をみることが子の負担になる」等の回答が多かった。同居のデメリットをあげた人は、近居のデメリットに比べて多かった。

また、同居のデメリットをあげる人は、子世代では、親と同居する人に比べて、近居している人で特に多かったのに対し、親世代では、子と同居・近居していない人で多かった。

同居のデメリットは、実際に親や子と同居している人よりも、していない人にイメージされやすく、近居より同居の方がデメリットがイメージされやすいと考えられる。

(4) 行政に望む施策

このようななか、家族の絆で支え合う暮らしの促進に向けて行政に望む施策としては、親世代では「同居・近居のための住宅取得・リフォーム費用補助の強化」や「同居・近居に対する税制上の優遇措置」が多かった。これらを含め、行政に望む施策は親世代の方が子世代より取組みを望む回答が多い傾向にある。

また、親世代は「安心して介護ができる環境づくり」を望む人も多く、息子・娘世帯との同居や近居を好ましいと考えながらも、自身の老後の介護等が子の負担になると懸念する人が少なくないことがうかがえる。